茨城大学教育学部教育研究所紀要第26号 (1994) 9 − 17

カルチャーセンターの楽しみ

−外国語講座の参与観察を通じて−

岩 佐 淳 一*

(1993年11月17日受理)

Enjoyment of a Culture Center —from participant observation in a foreign language course

Jun-ichi IWASA

(Received November 17, 1993)

はじめに

本稿は，80年代に大きく発展したいわゆるカルチャーセンター等の民間教育文化機関になぜ人々が集まるのか，いわゆるカルチャーブームとはなにかという問題意識のもと，こうした学習の場所＝トポスはなぜ楽しいのかという問題を，参与観察，インタビュー調査，アンケート調査[1]から考察することを目的とする。

学習の場としての民間教育文化事業施設

民間資本によって，社会人を対象に，趣味，けいこごと，教養に関する学習からスポーツなど広い分野の科目・内容を有料で提供する営利事業を民間教育文化事業とよぶ[2]。民間教育文化事業は人々の(相対的)豊かさの実現，自由時間の増大，学習志向，健康志向を背景として近年，大きく成長した。こうした状況を背景に1989年にはこれらの事業の全国組織として全国カルチャー事業協議会が発足している。

ところで，民間教育文化事業はいわゆるカルチャーセンターを中核として発展をとげてきた。カルチャーセンターは新聞，放送，デパートなどが顧客への文化的サービス，還元事業として始めたもので，瀬沼克彰によると，三つの段階を経て発展してきた[3]。第一期は1973年の朝日カルチャーセンターの設立まで。第二期は79年までで，この時期は大都市に大型施設の設立が相次いだ。第三期は中型規模の講座が地方に相次いで設立された80年代以降である。特に80年代前～中頃にかけては

* 茨城大学教育学部(〒310　茨城県水戸市文京2丁目1 − 1).

開設講座，受講者数が急増し，いわゆるカルチャーブームが起こった。しかしながら，90年以降，カルチャーセンターは曲がり角にきているといわれる[4]。80年代後半以降，その新設数が増えなくなったのである。この理由としてはヨガ，エアロビクスのような人気講座が出にくくなったこと，地価高騰のあおりによるテナント料の値上げで新規参入ができにくくなったこと，などが指摘されている[5]。カルチャーセンターは急増期から安定期に入るとともに量から質への構造転換が迫られているといえよう。

ところで民間の教育文化事業でおこなわれる学習内容は文化事業系，レジャー産業系，健康産業系に大別することができる。文化産業系には大資本が経営するカルチャーセンターをはじめ外国語学習施設・教室，スポーツを除いた趣味，けいこごとに関する学習教室などが含まれる。レジャー産業系にはテニススクール，マリンスクールなどが，健康産業系にはアスレチッククラブ，スイミングクラブなどが含まれる。

これらのコースは比較的学歴や知的好奇心の高い既婚婦人や学校教育が終わったあとも知的関心が衰えない社会人を中心に多くの人々を集めているが，たいてい週1，2回程度，3か月から半年で一講座が終了するようになっており，(最近は1年ものもある)専任の講師はいないか，いても少数で，ほとんどは外部の講師に依存するのが特徴である。本稿では文化産業系に属する民間教育文化事業施設を広義のカルチャーセンター，新聞・放送など大資本が主として駅のターミナルに設置するものを狭義のカルチャーセンターとし，特に断らない限りはカルチャーセンターという用語を使う場合は広義のそれをさすことにする。

観察・調査の概要

観察・調査場所は東京都内の社団法人が日本とタイの相互交流のための人材育成という名目で開設しているタイ語のみの単講座(以下,「講座」とよぶ)である。受講は有料で，一講座は週1回，ないし週2回で組み立てられ，2，3か月から半年で修了するようになっている。専任の講師は1名しかおいておらずそのほかはすべて外部講師に依存している。

「講座」は別の団体が外国人を対象に設立している日本語学校の教室を借りておこなわれており，コースは初級から上級まで，受講者のレベルに応じて幅広く用意されている。それらのコースは会話・文字・講読などに分かれる。コースあたりの受講者数は約5名から20数名。上級コースへ進むほど人数は少なくなり，初級コースではもっとも人数が多い。一回あたりの授業時間は2時間。本観察・調査はこのうち会話初級コース・文字コースでおこなった。会話コースは第一段階の会話初級コース(入門コース)を終えて入った受講者が大半を占めており，いくつかのコースを統合してつくられている。文字コースは会話初級コースを終えた受講者がタイ文字の基本(英語のアルファベットのようなもの)を学ぶコースである。(この「講座」ではタイ文字をいきなり学習することは初学者日本人には難しいとの理由から，まずローマ字を使ってタイ語の基本会話を学習させたのち，本格的に文字を学習させるというステップを踏んでいる。)

さて,「講座」の大きな特徴は年齢，性別，職業，学歴がきわめて多様なことである。年齢は大学生から60歳を過ぎた高齢者まで幅広く，職業，学歴にも斉一性は全く見られない。また，受講は有料であるが受講に際して事前の資格，制限は課されない。この「講座」に集まる受講者の共通点はタイ語への関心，あるいは必要性だけである。以上のような特徴は前述のカルチャーセンターの特

徴に共通するものだ。「講座」は広義のカルチャーセンターの範疇に入れることができよう。

筆者が「講座」に在籍したのは1988年から1990年までの3年間であるが，そのうち，参与観察，インタビュー調査をおこなったのは1989年6月から9月のうちの3か月間である。インタビューは授業終了後に，本人の了解を得て，喫茶店でおこなった。また，アンケート調査は授業終了後の教室，ロビーなどでおこなった。

インタビュー，アンケート被調査者の属性と学習の動機

まず，指摘しておかなければならないのはタイ語は普遍性のない言語だということである。英語のように国際的な言語として世界的に通用せず，基本的にタイ一国だけで使われる。また，声調言語である(五声)こと，文字が見慣れないことから日本人にはなじみにくい言語であるといわれる。さらに需要が少ないため，日本国内で学習する場が限定されていることも大きな特徴である。したがってタイ語を学習しようとする者はそれなりの明確な意図と目的を持って講座を受講するものと思われる。

インタビュー・アンケート被調査者は参与観察をおこなったコースの受講者13名である。調査時点で受講者=被調査者は半年から1年程度のタイ語学習を経ている。登録しても受講しない人もいるため，登録された人数と実際の受講者数は必ずしも一致しない。コースの受講者は20歳代から50代までの広がりを持ち，男女の比率は約半々であった。職業は会社員が半数を占めている。学歴はこのコースに限っては大卒が多く，高学歴の傾向がみられる。さて，コース受講者の属性と学習動機を尋ねた結果をまとめたものが表1である。受講者のほとんどはタイへの渡航経験を持ち，それが学習動機を形成している。コース13名中，6名はタイ語でタイ人とコミュニケーションしたいと答えた。タイ語でのコミュニケーション欲求がタイ語学習の強い動機になっていることがうかがわれる。また，タイ語でタイ人とコミュニケーションしたいと答える受講者に女性が多かったのが特徴である。

表1 インタビュー・アンケート被調査者=受講者の属性と受講の動機

人	年齢	性別	職業	学歴	動機
A	30代	M	教員	院卒	仕事のため，コミュニケーション
B	50代	F	主婦	無回答	コミュニケーション
C	30代	M	会社員	無回答	仕事のため
D	20代	F	会社員	大卒	コミュニケーション
E	50代	F	主婦	大卒	配偶者現地赴任
F	20代	F	会社員	大卒	タイ人の友人がいるため
G	50代	M	会社経営	大卒	仕事のため
H	30代	F	アルバイト	大卒	コミュニケーション
I	30代	M	教員	大卒	タイに居住のため
J	30代	F	無職	無回答	国際結婚・居住のため
K	30代	M	会社員	高卒	自己の可能性を試すため(ママ)
L	40代	M	会社員	高卒	コミュニケーション
M	30代	F	会社員	大卒	コミュニケーション

※ 性別のMは男性，Fは女性をさす。年齢は被調査者の希望で明確に特定しなかった。
「コミュニケーション」とはタイ人とタイ語で会話したいという意味である。

A:タイの農村へ入ったらさ，全然英語つうじないんだよね。話も何も全然できない。村人とコミュニケーションしようと思ったら，もうタイ語やるしかない。で，ここへ来たの。

F: タイ旅行中，タイ人の友達ができて手紙を書こうと思ったんだけど，でもタイ語できないから勉強しようと思って。
H: あんまりタイは興味なくて，インドの行き帰りに寄るだけだけど，なんか…タイ語も話せるといいなあと思って。

タイは東南アジアでは比較的英語が通用しない国である。ことに地方へ行くと英語の通用する範囲はかなり縮まる。タイ世界に入るためにはタイ語の習得は不可欠である。したがってコミュニケーションしたいという場合もより切実である。 また，一名を除いた他の受講者は仕事，居住などの具体的理由をあげている。仕事をあげるのは男性が多い。いずれにせよ，受講者は単なる教養以上のなにものか，すなわち明確な目的を持って「講座」を受講しているのだということが指摘できる。つまり，受講によって何かしらの外発的報酬，利益を獲得することが第一の目的なのである。

「楽しさ」とは何か (1) －チクセントミハイのフロー概念によせて－

M• チクセントミハイによると「楽しさ」(enjoyment) は外発的報酬＝金銭，地位の獲得，競争によって生まれるというよりも内発的報酬＝活動それ自体の満足が報酬となることによって生まれる[6]。行為そのものの中の楽しさに動機づけられて行為するとき人は行為に満足感を抱くことができるが，その行為が外からの圧力や報酬に動機づけられていると人は欲求不満や疎外感などを経験するというのである。チクセントミハイの調査によれば，「それを経験することや技能を用いることの楽しさ」「活動それ自体－その活動の型，その行為，世界」という，「それ自体に固有の経験」が活動の報酬源としてもっとも多く指摘され，報酬源として「権威，尊敬，人気」「競争，他者と自分との比較」をあげる人はすべての活動に一貫して僅かしか見いだし得なかったという[7]。活動の楽しさに共通してみられる基礎的特徴は創造的発見の感覚，克服のための挑戦，困難の解決等などを伴う場合である[8]。そして人が「楽しんで」いる時に感ずる感覚をチクセントミハイは「フロー」という概念として提示した。フローとは「全人的に行為に没入しているときに人が感じる包括的感覚」と定義される[9]。フローの状態は次のような特徴を持つ[10]。

1) 行為と意識の融合
2) 限定された刺激領域への注意集中
3) 自我の喪失
4) 支配の感覚
5) 個人の行為に対する明瞭で明確なフィードバック
6) 自己目的的性質

フロー状態は遊びに典型的にあらわれるが，仕事や日常の生活などさまざまな領域でみることができる。たとえば，外科医という仕事はそれ自体，技能を有し，責任の大きな仕事である反面，手術という行為自体が明らかに楽しいものであり，それゆえ，外科医という仕事は外発的報酬＝金銭，地位とともに内発的報酬＝手術それ自体の楽しさを含んでいるとされる[11]。また，煙草を吸う，おしゃべりといった日常のなにげない日常生活の経験も，より単純ではあるがフロー活動になりうることからチクセントミハイはこれをマイクロフロー活動と名付けた[12]。

「講座」は楽しいか

ではタイ語「講座」は受講者にとって楽しいところとして認知されているのだろうか。前述したように受講者は外発的報酬を求めて受講している。もし受講者が「講座」を楽しいと感じているならば，その楽しさは外発的報酬にもとづくものなのか，それともチクセントミハイがいうように内発的報酬＝勉強それ自体の楽しさなのであろうか。さらに受講生はフロー感覚を得ているのであろうか。

興味深いことに，インタビューでは1名を除いて全員が「講座」は「非常に楽しい」ところであると答えた。では何が活動の楽しさを生んでいるのか。チクセントミハイにならって，活動が楽しい理由の順位をつけてもらった結果が表2である。

表2　活動が楽しい理由の活動別平均順位

項　　目	ロック・クライマー	作曲家	ダンサー	チェス・プレイヤー（男）	チェス・プレイヤー（女）	バスケットボール選手	「講座」受講者
1.それを経験することや技能を用いることの楽しさ	1	1.5	1.5	1	1	5	4
2.活動それ自体－活動の型，その行為，その活動が生み出す世界	2	1.5	1.5	2	2	4	1
3.友情，交友	3	6.5	6	4	4.5	3	3
4.個人的技能の発達	4	3	3	3	3	2	2
5.自己の理想の追求	5	4	5	6	6.5	6	6
6.情緒的開放	6	5	4	7	6.5	8	5
7.競争，他者と自分との比較	7	8	8	5	4.5	1	8
8.権威，尊敬，人気	8	6.5	7	8	8	7	7

※チクセントミハイの掲げた表に「講座」受講者への調査結果を付加した。元の表の引用は注6)の文献である。

この順位をみると受講者はタイ語の勉強それ自体を楽しいものとしていることがわかる。次に楽しい理由としてあげたのがタイ語能力の発達である。これが外発的報酬を伴う受講者の本来的目標である。タイ語克服のための挑戦という感覚と会話が少しでもできるようになったという喜びが受講者に楽しみ感を生み出している。

D:このまえ，レストランに入ってクルゥアイ・ブアッチー(注:デザートの名前)を注文したんだけど，最初全然通じなくて。何度も言い直しているうちにやっと通じたの。すっごく嬉しかった。

しかし，タイ語の能力の発達については「講座」をとおして異なる年齢や性，職業の人々と一緒に努力してタイ語が上達するのが楽しいと答える受講者(B,E)もおり，必ずしもストレートに外発的報酬と直結するものでもないことが伺われた。このばあいはどちらかといえば今までの自分をタイ語の学習をつうじて「超越」するという感覚に近い。競争・比較(タイ語会話力に関する)はきわめて低い位置づけしか与えられていない。試験がないために他者との比較がなされないことも位置づけが低い理由の一つであろう。勉強それ自体とタイ語の能力の発達とともに高い位置を与えられたのは友情・交友であった。(これについては後述する)外発的報酬に直結するタイ語能力の発達だけでな

く，勉強それ自体に楽しみを見いだしているところが注目される。そして勉強の持つ自己目的的活動性＝内発的報酬が楽しさを感じるための要件となっているという調査結果はチクセントミハイの説を裏付けるものである。

「講座」での没入感＝フロー感覚については2名を除いて(それぞれ「あまり没入感は得られない」「よくわからない」という感想を寄せた)全員が深い没入感を得ていると答えた。(実際のインタビューでは「没入感」ということばではなく「集中」「夢中」というワードを使用している)

次に「講座」がもたらすフロー感覚を検討してみよう。

1) 行為と意識の融合・自我の喪失

フロー状態にある人間は二重の視点を持たない。「講座」の授業においても下のA,Eの言葉が示すように，自分を外から眺めることをしない。つまり，自分が今授業を受けているという感覚を持たない。意識は授業の中に融合し，時間の経過はきわめて早く感じられる。

A: すぐ時間がたっちゃうね，もう一時間くらいはやってもいいな。

E: 2時間はあっという間にすぎてしまってもの足りないぐらい。

2) 限定された刺激領域への注意集中

受講者はタイ語だけに意識を集中する。そこは日常の仕事や家事から開放された一種の<聖なる>時空である。人々の意識は学習行為に凝縮される。

E: 夫が単身赴任していて，家に受験生がいるんだけど…そんなことここへきたら忘れちゃう。

F: 授業中はタイ語のことだけに集中できる。他のことは全然頭に浮かばない。

3) 自己目的的性質

表2でも見たように受講者はタイ語の学習それ自体を楽しい理由の筆頭においている。外部に目的や報酬を必要としない自己目的性はフロー感覚を得るための一つの条件である。

こうしてみるとチクセントミハイがフロー経験の特徴としてあげるものの多くと「講座」の授業経験とが重なっていることがわかる。

外発的報酬にくわえて，勉強それ自体の楽しみが経験されること，一定のフロー感覚が得られること，これらが複合して受講者に「講座」を「非常に楽しい」と感じさせているのである。具体的にはタイ語の習得という外発的報酬の獲得という動機が根底にあって，勉強それ自体の楽しみ，タイ語の能力の発達による克服への挑戦感覚とそこに由来するフロー感覚に「講座」の楽しみは由来するのだといえよう。だが，こうした楽しみの感覚は何もカルチャースクールに特有のものではなく，学校教育の場や社会教育の場などでもしばしば経験されたり，観察されるものだ。

「講座」において生ずる楽しみを別の側面から考察してみよう。

「楽しさ」とは何か(2) － V・ターナーのコミュニタスによせて－

さて，学習の動機を尋ねたときに受講者は必要性，ビジネスといった明確な目的＝外発的報酬をあげた。同時に注目しなければならないのは受講者が楽しい理由に「友情・交友」をあげていることだ。受講者に「講座」の楽しみについてフリートーキングしてもらった結果，「講座」に集まって，友人や人と会うことを楽しみの源泉として強調する意見が多くみられた。以下，いくつか例を示そう。

A: 今の楽しみは勉強の楽しみもあるけれども，酒を飲んだり，友人と話したりする楽しみかな。

B: 勉強も楽しいけど，ここへ来てみんなの顔を見るのが楽しいの。

F: 人に会うのが楽しみ…いつも会う人だけだとおもしろくない，ここにはいろんな人がいる。

こうしてみると克服のための挑戦＝タイ語の習得や勉強それ自体とは異なる楽しみが大きな位置を占めるものとして浮かび上がってくる。つまり，集まること，人に会うことそれ自体の楽しみである。

ここで「講座」は疑似的な学校ではないかという疑問も出てくる。たとえば，前述したような勉強それ自体の楽しみや能力の発達＝外発的報酬，そして友情・交友もすべて学校に備わっていると見ることもできる。しかし，インタビューのなかで，受講者は「講座」は断じて“学校のようなもの”ではないと強調した。その違いは次のようにまとめられる。

1) 年齢・職業がまちまちであること。
2) 受講者の属性をお互いが詳しく知らないこと(しかし，関係は非常に親密であり，共通の話題で話が弾む)。
3) 出席，宿題，試験といった強制がなく学習が本人の自由意志に任されていること。
4) 週1度あるいは2度だけ現出する場であること。
5) そしてそれは構造化される前に消滅する(2，3か月から半年で修了する)こと。

こうした特徴はカルチャーセンターに共通してみられる大きな特徴である。受講者は授業終了後，しばしば，連れだって喫茶店や居酒屋へ行くが，そこでの会話は概ね，タイ語やタイ社会・文化に関する話題や授業の内容などに限られ，個人のプロフィールや職業に関する話題はあまり出ない。ここでは社会的存在としての個人はエポケーされているのだ。では「講座」はどのように形容できるだろうか。それを知るにはV・ターナーのコミュニタス概念が参考になる[13]。

コミュニタスとは人々がお互いに「あるがまま」に交流しあい，地位－役割にもとづく特徴をはぎとられて裸のままで対面し合う状況のことである。山口昌男流にいうなら，コミュニタスとは「広義の感性の共同体」，「長屋のイメージ」と言うことになろうか[14]。コミュニタスは通過儀礼，千年王国の運動など，宗教，芸術，文学，演劇などの分野において容易に観察されるが，法，倫理，親族，経済といった規範の文化にも見いだされる。

コミュニタスは次のような特徴を持つ[15]。

1) 地位－役割関係から免れている。
2) 非差別的，平等的，直接的であり，制度化されない。
3) イン・グループ化しない，閉じた集まりではない(中心がない)。
4) 仲間意識，共同性。

以上のようなコミュニタスの諸特徴が「講座」と比喩的に響きあっているのは明らかであろう。「講座」のなかでは受講者の社会的地位や役割は解消され，関係はきわめて平等的，非差別的である(宿題などの強制や成績によって受講者を分節しないことも起因している)。コースはタイ語の習得という関心だけで結びついている一種の共同体であり，夾雑物がないだけ純粋である。タイ語，タイへの興味(あるいはマイナーな語学を学習しているという感覚)を媒介に親密な仲間意識，共同性が培われる。しかし，それは閉じた共同体ではない。前述したように「閉じられる」，「構造化される」前に“消滅”してしまう。すなわちそれは構造に対置される“反構造”なのである。。ターナーもいうようにコミュニタスは一体感を生み出すものというより社会の規範にがんがらじめにされた一体感を解き放つものだ[16]。こうした「講座」のコミュニタス的性格こそ受講者に「講座」を楽しいと感じさせる大きな要因となっているのではあるまいか。

コミュニタス，生涯学習の場としてのカルチャーセンター－まとめにかえて－

「講座」での観察・調査はカルチャー・センターにおける「楽しさ」が学習以外の部分に大きく依存していることを示唆している。カルチャーセンターは今日の都市において有力な生涯学習の場であるといっても過言ではない。昨今は中高年の主婦ばかりではなく，雑多な人々が学ぶ場となりつつある。だが，こうした場に人が集まる理由を「人々の学習意識の高まり」とだけ考えるのは速断といわざるを得ないのではなかろうか。このような場に人が集うのは人々が社会生活では味わうことが難しいコミュニタス的紐帯を求めるからであり，社会的地位や役割にとらわれない自由な人間関係を求めるからに他ならない。いわば，その場が一つの反(社会)構造的色彩を帯びているからなのだ。家庭や職場といった“(社会)構造”のもつ息苦しさから我々を解き放ってくれる癒しの場であるというところにカルチャーセンターが楽しい理由の一端があるように思われる。その空間のなかでは「野心，嫉妬，権力闘争といった構造の痛み」[17]は取り除かれているのである。

山崎正和は家庭や企業集団以外に新しい人間関係ができる－社交の場ができる－とそれはそこに加わる人間に一種の積極的な「役割り」，演技を求める，そしてこういう場が人生の中でより重い意味を持ち，そこに人々が深く関わるようになるというところに「柔らかい個人主義」「新しい自我」誕生の予兆をみた[18]。カルチャーセンターの場は学習の場であるとともに社交の場，自己表現の場であることに留意しなければならない。山崎はまた，市民大学に参加した主婦のなかから，そこでおしゃれができるのが生きがいだという切実な声が聞かれたというエピソードを紹介している[19]。生涯学習あるいは生涯学習社会を考えるとき，そこにおいて空間としての，人間のつながりとしてのコミュニタスをいかに構築するかという視座を持つことが重要なのではないだろうか。なぜならコミュニタスは人間性回復の場なのであり，そうした役割を生涯学習は担っているからである。たくさんの人間が全人格的につき合える，人と人がつながる，そして自己表現の場として生涯学習の場をとらえることの重要性を人類学の視点は示唆しているように思われる。

注

1) ここでいうアンケート調査とは質問紙法調査ではないことはいうまでもない。
2) この呼称は『日本教育年鑑』(日本教育年鑑刊行委員会編，ぎょうせい，1988年版)に依った。教育ビジネス，スクールビジネス，カルチャービジネスとも呼称される。
3) 瀬沼克彰『企業文化の展開』(大明堂，1986),pp.154－156.
4) 日本教育文化年鑑刊行委員会編『日本教育年鑑』(ぎょうせい，1990年版)参照。
5) 同書参照。
6) Mihaly Csikszentmihalyi,Beyond boredom and anxiety,(Jossey－Bass Publishers,1975),p. 13.(今村浩明訳『楽しみの社会学－不安と倦怠を越えて－』(思索社，1979)p.35，なおこの訳書は現在『楽しむということ』に改題されている。)チクセントミハイの手法を援用したすぐれた業績として佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー　モードの氾濫と文化の呪縛』(新曜社，1984)があげられる。

7) Ibid., pp. 179-180. 訳書, pp. 265-266.
8) Ibid., p. 181. 訳書, p. 267.
9) Ibid., p. 36. 訳書, p. 66.
10) Ibid., pp. 35-54. 訳書, pp. 65-92.
11) Ibid., pp. 123-139. 訳書, pp. 185-209.
12) Ibid., p. 141. 訳書, p .214.
13) コミュニタス概念はチクセントミハイによっても引用されている。(Csikszentmihalyi, Ibid., p. 30. 訳書, p. 57.)
14) 山口昌男『文化と両義性』(岩波書店, 1975),p.238.
15) Victor Turner, Dramas, Fields, and Metaphors Symbolic Action in Human Society, (Corne ll University,1974).(梶原景昭訳『象徴と社会』(紀ノ國屋書店, 1981)第4章, 第5章を参照した。また (The Ritual Process- Structure and Anti- Structure (Aldine Publishing Company, 1969). (富倉光雄訳『儀礼の過程』(思索社, 1976)) 第4章でもコミュニタスに関する議論がなされている)。
16) 同書訳, p. 269.
17) 同書訳, p. 250.
18) 山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』(中央公論社, 1984), pp. 58-60.
19) 同書, p. 96.

付 録

表2 活動が楽しい理由の活動別平均順位アンケート

*講座が楽しい理由に順位をつけてください。

1. コースの人と会話の競争をしたり, 他人と会話のうまさを比べること……( )
2. コースの人々と交わったり, 話をしたりすること, 友情……( )
3. 勉強の世界にひたること……( )
4. 自分の理想の追求……( )
5. 自分のタイ語能力が上がること, 上手くしゃべれるようになること……( )
6. タイ語がしゃべれて目立ったり, 注目されること……( )
7. スカッとしたり, さっぱりすること……( )
8. タイ語をしゃべること, タイ語をはばかりなくしゃべれること……( )